

真 生

第 四 卷 二 月 號

□眞に生くるとは即ち道に生るのだ。道を外にして其の永生はない。

□人はさういつまでも衣食の奴隷としてのみ生るものではない。そこには無限の價値に生きたいのだ。無限の價値とは即ち永生の道である。

□キリストは十字架を負ふて道に生きた人である。そこには道の外に自己の生命もなかつた。否道そのものが彼の眞實の生命であつた。そこに彼の生命がある。

□道の爲めに死ぬとは即ち道に生るのだ。眞人の世界は即ち道の世界である。道を外にしてどこに眞人の世界があらう。道こそ眞人の世界である。

□そこに天地の大道を開け、そこに眞人の光も輝ぐ。永生の道は唯だ眞の道に生くるにある。道の外に眞の生命はない。唯道のみぞ生命である。

□されば友よ、吾等は如何に生くべきぞ。名譽にか、金錢にか、將またいづれ死に逝く此の肉慾の奴隷にか、之こそ眞に吾等の一代問題である。

□釋尊の一生も孔孟の一代も能く見れば道に生くるより外はなかつた。

□されば友よ、道に生くるとは即ち道に生くるのだ。道に生くるこそ即ち眞に生くるのだ。道とは神の道であり、即ち如來の道である。(念)

代時きべるた來

目次

●来るべき時代	尅子
●永生の道	土屋 觀道
●お、念佛よ	山口 常照
●今度の三昧會	中村 辨康
●吾朋便り	

▼人間はどんなに強さうな事を云ても最後のドタン場まで行く。どうしても「付うぞ」と頭を下げずには居られぬやうな氣持を持つてゐる。それは弱味と云へば人間の弱味であらう。又人間は大きい仕事をやり切らうとすればする程、内に何等か活力を覺へなくては出来ぬ、或は大きい壓迫を乗り切らうとすればする程、内に内燃力を感ぜなくては出来ぬ。此二つが即ち宗教心である。

▼自分の欲陷を見出し、弱味を感じて「付うぞ」と頭を下げる。そこ、そこに何者からか力を恵まれて強くなり、此度は何ものをも乗切つてやつて行ける強者になる。自分の弱さを弱さとして知るものが最も強いものである、實に不思議であるが、自分の缺陷の前に頭の下つた者は此度は強者として立てる、そこに救はれた生活がある。

▼宗教的祈り——念佛の尊さは一朝にして此弱さを強さに變へられるところにある、全然自己を抛擲したところに信順歸命があり、信順歸命は直ちに如來の内應となり、佛としての強さを持つて自己が復活する、爰に至つて自己の放棄ではなくて自己の本性に還えした事になつたのである、それが佛であり、無我であり、又眞實我であるのである。

▼茲に於て先の二つは一であり、弱いから強くされたのであり強いから常に弱くなれる。(尅子)

終日ジ―と同じ川端で釣をしる人を見ると、よくまあ、彼廢事がやつて居れるものだと思はれます。而し魚釣をしてゐる本人では此麼面白い事は無く、動きもせぬ浮標の上刻々無限の變化を認めて我れを忘れてゐる、そして一瞬間も飽く事なく、暇だなんて思ひもよらず一日中を忙しづくめで暮れる。

一面靜かに見えるものの中に此忙しさがあつて、一面不粹に見えるものの中に此妙味がある、魚釣ほど不經濟なものはない、而しその不經濟な中に經濟で買へぬものがある。尙ほ進んで經濟を産むものがある——それが魚釣りを已めさせぬ力で、それが魚釣の生命である。

宗教も一面此麼非社會的な不經濟なものはない、而しその非社會的な中に眞の社會的動力が含まれてゐる。浮草浮草を遂ふやうな盲目的衝動のみで誰が満足し終れるだらう、無理に人生に「意義」を附けたがるのではないが、眞にやり甲斐のある事をすすめる程満足な事はあるまい。此自覺、此要求に就くのが宗教である。

此目的、此哀心すらもなく齷齪とのみしてゐるのは、それこそ却て非社會的である。何の經濟、何の生産ぞ、その社會は或る特權者流利己主義者の專有物になつて了ふ。此生活と人格の中心を定めるのは、佛に觸れる事である、自己の中に絶對中心の佛を見出す事である、そして其佛者、佛子としての體驗に生きる事である、そこに眞に自己の使命を果す事が出来、佛のみ旨、佛のみ心を顯彰する事が出来る、それが譎詐であらうか、傲倨であらうか。我々は生活の總てを此中心に集め、此一點から總ての生活を産んでゐる、だから總ての社會力を宗教に注ぎ、凡ての社會宗教から産んでゐる。念佛する事祈る事が其儘生活となりて居り直に人格の一分一角を建設してゐるものである。

我々は最早宗教以外の處に注ぐ事が出来ぬ、そしてそれが「来るべき時代」の示象である。(尅子)

永生の道

土屋 觀 道

永生の道とは即ち永劫に亡びない永生不死の道であります。誰人か此の世に生れて死なきものがありませう。而も是の死を超越して天地と共に永劫に生るのが即ち永生の道であります。一見此の世は死に見えて一切は不死に生きるのが即ち宇宙の深意であります。而も死を死と知らずして徒死するものは人として之は悲哀はれなものはなく、死を死と知りて不死の道を知らないものは之又味氣なき人生であります。然に唯一人こゝに人生の一生を通じて死よ、死を逸れ、不死より不死に生きるもの、之こそ眞に人生の意義であります。然に友よ吾人は果して此の人生の意義に目醒め、眞に永生の大道に生きつゝあるか、來る歳も來る歳も私共は、あはい一生を唯だ徒らに過して來たではないか。一日の計りは其朝にあり、一年の計りは其の元旦にありと、人にも教へ自らも教へられて來たのであるが、唯人か眞に此の永生の計り、眞に永生の道を計つて來たのであらう。ともすれば日夜徒に其の日を過して、己が尊き生命を失ふて來たのではないか。思へば實に慨げかはしき限りである。眞に生きとし、生ける人生の喜びは、永劫に亡びない價値の生活の外にはない。人はバンなくしては生きるものではないが、乍然又バンのみで生きるものではない。尤も世には其のバンにさへありつき得ないで、日夜この爲めに一生を苦む人々もあるが、乍然人はバンのみが眞生の世界ではない。中には食ふには困らぬ所から一生遊びでのみ暮して

ゐる人々もある。乍然之又眞實の世界ではない。一体人の一生は食はんが爲めの一生であらうか、而て又人の一生は唯之丈けで眞に喜び得るの一生であらうか。食はんが爲めの一生ならば食ふに困らぬ人々は唯食つて終ればよい。乍然それでは永生の望みは立たぬ。それでは生はただ其日暮の一生であつて葬式を待つの一生涯である。然るに友よ私が斯く言へば或は反對して言ふ人があるかも知れぬ、まさか人としてそんなに食ふことのみで一生を費す人もあるまいではないか。そして又そんなに食ふことのみを樂しむ人もあるまいではないかと。乍然友よ此の人生をよくよく考ふれば多くの人々の一生は大概は此の中の何れかに屬するの人々ではないか。前者は貧困の人々に多く、後者は有産の人々に多い。大地主と小作人との間にも近頃は此の傾向の多いのを見る。乍然人にして少しく各自の生活を眞剣に反省し來たる時、かゝる人生の一生が果して眞に生ける人生の喜びであらうか。世には一生の間只食ふ爲めにのみこれ追はれて、一日のゆとりもない貧困の人々、或は働らかんとしても働くに力もない又職を求めて職もない困難の人々も多い世に、唯自分のみ衣食に飽いて、日夜なすこともなく徒に遊び暮すと云ふことは果して價値ある人生の一生であらうか。少しく人生の眞義に目醒め自らの生活を反省し來る時どうして遊んでゐられやう。之を國家の上より見るも、又人類社會の上より見るも、決して許さるべき事ではない。まして朝から晩まで一生かくの如くして、人の働いたもののみを消費して、社會に對する何等の働きもないことは之ほど人としてあさましい生活はない。それに自分一人の立場から考へても一生何等なすこともなく人の働いたもののみを食ひつゝぶして、此の世を終ると云ふ事は恰も飼犬にも劣る人生ではないか。私は近頃になつて痛切に此の事を感せずにはゐられない。

されば人生の價値とは何であるか、それは生がいのある人生の活動に外ならぬ。人格の完成と云ふつまりは價値ある人生の人となることである。價値ある行爲をなさないうで價値的人格の高からんことを欲するのには、それこそ木によつて魚を求むる愚人の寢言である。而も其の行爲たるやは決して人の知ると知らないとは關せない。たい價値ある行爲を爲すことがそれである。

然にそれが私共に果して出來てゐるであらうか、私は或日忽然として大空の中に次のやうな幻を見た。ある處に二人の人間がゐた。一人は富豪の家に生れて一生此の爲めに何事も爲すなくて衣食にも困らず生長した、一人は貧困の家に生れて小さい時から働かねば食へないで一生を送つた。前者は生活の苦しみも知つた、又日夜衣食に満足を感じて自分も之を幸福として一生を遊んで喜んで暮して死んだ。後者は一生遊ぶことも出來ずして或は井戸堀りに或は鐵道の工夫に庸はれて一生貧困の中に働いて不平で死んだ。而も二人は後に何を遺したか。

此の二人の人生は何れが意義ある人生であつたのか。一見するところ富豪の家に生れた一人は仕合であり、貧困の家に生れた人が不幸である云ふことは誰でも反對しないところであらう。乍然友よ人としての生存の意義に於て是等の人々の社會に遺した眞實の價値は何であらうか。靜に思へば富豪の家に生れた前者は一生遺産の食ひつぷしであつた。然に貧困の家に生れた後者は少くとも彼自らの生活費を働いた。而も後者は其の上に井戸を堀つては多くの人に井水を供し、鐵道工事に働いては未永く幾千萬人の交通を計つた。友よ私共は此の何れを學ぶべきであらうか、之は僅かに單なる一つの幻に過ぎぬ。乍然眞に此の二人者の人生を味ふとき私共は實に驚くべき眞人の生活が此の何れにあるかを發見す

る。而も友よ私共は其の實此の何れを學ぼうとしてゐるのか。是等二人者は未だ人生の眞義に目醒めては居なかつた。乍然未だ此の自覺に目醒めないとは云へ、其の爲したる彼等二人者の生活は社會的價値そのものゝ上に於ては大なる相違がある。私は之を見て初めて勞働の眞價値を知つた。

オウ無爲徒食の富豪よ世に汝ほご哀れなる人々はない。乍然友よ私はかく云へはとて決して今日の勞働者萬歳を云ふものではない。從て又今日の社會主義者の云ふやうなにかぶれてゐるものではない。否むしろ彼等の説には心から讚成出來ない所が多い。乍然茲に引く所の一例は眞の勞働の神聖を云ふのであつて、此の中に現はれた人生の眞價値は又どうしても見のがすことができぬではないか。

然ば友よ私共は一生のうち眞に自己の爲め社會の爲めに、何を爲すべきであるであらうか。決して徒に遊んで暮すのか眞の人生の價値ではない。從て私共はごこまでも意義ある人生の價値的生活に立たねばならぬ。而て若し世の富豪の人々が早くから此等のことに氣づいてくれて、少しでも眞に自分の生活を反省して其の道に生きたとせば、世は忽にして、善良の社會と變り、人類の文化は見る間に進展し來るであらう。そして又たとへ一生を貧困の中に送つた彼等勞働者も今一步を進めて自己の天分を自覺してその職業に従事した事ならば少くとも彼の本心の満足は謂知れぬ喜びの中に神の生活を味ふ事が出來るであらう。さうしてかゝる人々が此の世に一人でも多くふえるといふことは、そのことが直に人類の進歩であり、更に其の自身の價値の生活ともなるのである。

然に友よ私共の生活は果して如何なる生活であるであらうか。生れたものが死ぬとは誰も否定の出來ない事實である。乍然それにかゝらず自分の死だけは逸れたいが私共の事實ではないか。而も不

死の世界に生きない限り此超脱は得られない。而て此の死をまぬかるゝ事が即ち人生の一大事である。然は私共は此の死をどうして逸れるか、所謂價値の人生は此の不死の生命に基礎つけられた生活である。今時の人々は働くこと云ふことを金錢の爲めとのみ思つてゐる人がある、成功とさへ云へば金錢の事だと思ふ。思へばあわれな事ではないか。金錢の必要は唯生活を保つる範圍に限る。金錢そのものが貴いのは決してない、從て金錢は唯生活を補けるといふ点に於てのみ大切である。然に一生金さへ貯めれば人生の能事終りといふやうな考へはそれこそ實に金錢の奴隷でないか。是の他名譽の如きも、名譽ある行爲に對して之を名譽とするに過ぎぬものを、それを知らずして名のみにあこがれる人の如き、之又名譽の奴隷である。して見れば凡そ人間の生活は其の人の眞の自覺に待たない限り、多くは一生肉慾の奴隷となり、或は財慾の奴隷となり、又名譽の奴隷である。されば私共の一生はかゝる人生の一生で決して心からなる眞の満足が得られるものではない。そこには永生の欲求なり更らに無限の向上が是等の上に超然として輝いてゐる。而て私共の一生は單なる五十年や百年の人生で満足するものではなく永生の光に生くるのが私共の眞に僞らぬ本心の望みであらねばならぬ。何とかして永生の道に生きたい、何とかして眞實の價値に生きやうと望むのが即ち不死の要求である。人生意氣に感ず功名亦誰か論せんやである。そこには私共の本心が輝く。而てそこには決して金や名譽に捕はれない處がある。而てそれは吾人の本心が眞實に生きやうとする所から、其の本心の力の爲めに、あらゆる肉慾と財慾と名譽とを超越せられ、更らに其れよりも大なる價値の生活に生きるからである。乍然それが私等の自覺となつて、眞に自由に働くには更らに大なる眞の目醒めが必要であるが、乍然よしんば、そこまでに眞の目醒めが

ない人と雖も少しく考へある人々は決して人生の一生を單に肉慾の一生たらしめ或は金錢名譽の一生たらしめる事は決して喜ばない事である。若も出来るものならば名譽もいらす金もいらす命もいらすにほごの大業に全心をこめた自己の一生が本心の願いでないか。私共が死に度くないと云ふことも要するにかゝる眞生の生活に此の身を提げんが爲めである。そして又私共が金錢財寶を愛したのも要するに此の意味に於ける理想實現の資にせんが爲めである。其他名譽も同じであつて、本來私共が名譽を喜ぶものかゝる價値的行爲を善ぶの前提である。從て眞實の名譽とは名譽ある行爲そのもの、外には何んにもない。

然るを今時の世人稍もすれば此のことを知らず、單に肉慾の奴隷となり或は名利の奴となつて、未だ眞實に價値の人生に目醒むることをせないのは如何にも残念の極みである。乍然靜に人生の一生を顧みて、限り無き宇宙の本源を想ふ時誰人か眞に自分の本性に歸らない人があらうぞ。而て永生の道果して如何、價値の人生そも何物であらう。私は云ふ、それは眞劍に自己の本心に生きることだ。何事でも眞面目に本心に生ればよい、何でも時處位に即して其の都度に吾人のとるべき最善の方法は自ら信ずる本心の命令に從つて、眞に之を行ふに限る。いはば本心の命するまゝに全力を献げて盡せばよい。それが即ち眞人の生活であり、それが永生の道である。吾人には吾人のとるべき本心がある。それが宇宙の本心と一致するところ、そこに一切の中心がある。そしてそれより外に自己の生くべき道はない。その時自己の生命は直に宇宙の生命である。宇宙の生命が即ち自己の生命となる。故に自己の本心は宇宙の本心と一つとなる所、そこに私なき自己の行爲となつて天地と一なる働きがでる。從て天地の心が自己

の心であり自己の心が天地の心となる。故に單なる自己の計らいを止めて、自己の本は心天地の間に漲る。そこには一切は一であり、一が即ち一切である。之を全一の活動と云ふ。其の時自分は神となる。一切は自分の心であり、自己の心は即ち一切の心なる。そこには萬法が一如である。此の一如の心が即ち佛の心である。此の外に佛心もなく、又衆生の心もない。我他彼此の見界を絶してゐる。一味平等の絶對の心である。從て其の心の働きは即ち絶對の働きであり、其の働きの外に別に絶對の働きはない。それが一如の働きであり。涅槃の境地であり、眞如の世界である。そこには時空を超越した眞心の働きがある。之を名づけて又佛性と云ふ。そこには單なる分別がない、それこそ宇宙の心である。或は如來の心とも云ふ。古人は天心とも云つた、或は神の心とも云ふ。如來の大悲と云つてもよい。心眞如涅槃妙心の世界である。

けれ共友よ此の本心の慾求は甚だ判り易いにかゝわらず信仰なくしては之に従ふことが甚だ困難である。それは何故かと云ふに、私共の實際生活は永い間の動物的生活の慣習によつて、いつしか、自己の本心が蓋はれて、排他的利己主義に墮してゐるからである。從て其の人の多くの生活は主として、排他的私利私慾の人生となり、よほど心して自己の本心を研かねば多くは貪瞋痴慢の我慾の爲めに眞に眞心が働かない。そこに人生の悩みがある。故に眞人の眞の悩みはむしろ之からと云はねばならぬ古來の偉人も多くは此處に迷ふてゐる。謂はば自己の本心に此の身と心が従はないの悩みである。善が判らぬでもない、要か見ねんでもない、けれども往々にして私共の生活は身自らに自己の本心を裏切つて出るのである。彼善導の自身は現に之罪惡生死の凡夫曠劫より以來常に没し常に流轉して出離の縁あること

なしと、又聖法然が愚痴の法然房十惡の法然房と歎かれたのも此の罪の自覺であつた。乍然私共は是等の愁歎を以て直に彼等を愚惡の人と批評してはならない。もとより之を釋尊の自覺と其の體現に比ぶれば或は遠く及ばない所もあらせられたかも知れない。けれ共未だ自己の本心にも目醒めぬ罪惡生死の凡夫に比ぶればもとより批較の限りでない。加之已に自分の行動を反省して佛陀の生活に及ばないことを知られた所、反つてそれだけ眞人の生活に生きつゝあられた証據でないか。從て自己の本心輝がすばぶうして自分の行爲が完全でないといふことが判からうぞ。されば善導法然が兩祖の如き、最も高き眞人の生活であつたといはねばならぬ。而も此の本心の願いは此の本心の完成である。而て此の完成は如何にして満足することが出来るであらうか、そこに顯はれるものが即ち如來大悲の本願である。要は自己の本心が宇宙の本心たる如來の大悲と融合して其の身によつて更らに自己の本心を此上に實現するのである。而て此の方法が念佛である。從て茲に自己の本心に從て眞に理想實現の出來ない人々は是等の一切を包擁して更にあますなき宇宙の本源たる如來の大悲に絶入して神人不二の生活に入ることが何よりである。そこは一切が許さるゝの所、そして又一切が慰ふべき所、そしてそこから初めて金剛の心も起り、あらゆる理想も實現せられ、一切の力もはぐまれて來るのである。而て此の心の充實が即ち念佛三昧であり、此の三昧の充實やがて又此の上に於ける覺佛の體現である。いはば自己の上に流れてゐる如來の生命が萬法の上に現はれる如來の生命と一體となつて、萬法の一切が自分を生かし、自分の一切が萬法を生かすところ、それが光明の生活である。一佛が一切佛に現はれ、一切佛が一佛に歸るところそこに一切が歸依佛の姿となる。而て一切が此の歸依佛となるところ、そこに一切が成佛する。そこに眞

人の生活があり、そこに永生の光がある。されば永生の道とは即ち神の道であり、念佛の道である。念佛を外にして真に永生の道はない。然に世人は何故に念佛を嫌ふのであらうか。恐らくはこれ真に其の念佛の何ものであるかを知らぬからであらう。

静に思へ、たといよし身體健康と雖も、真に眞實の信仰なくして果して之を保ち得るものであらうか。天地の大道に反したる私共の生活が即ち其の人の病源ではないか、然ば眞實の宗教が宇宙の本心たる如來に歸るところ、一切の病源は絶滅せなければならぬ。従て眞人の生活には心に病氣といふ病氣はないのである。若し吾人にして之ありとせば、それは如來の慈光に生る爲めの方便に過ぎないのであらう。従て又眞に信仰ある人の生活には決して經濟の上に悲しむことは無いのである。何となれば道に生くるものには自ら生く可き眞人の大道が開かれて來るからである。故に若し眞人の生活にして眞に保せられてあるからは、必ずそこに生活の道も出て來るにちがひない。それを知らずして唯徒に肉と財とに捕はれて、眞に生く可き眞人の生活を怠るは之こそ反つて自ら病弱の原因と貧乏生活の中心を造るものである。况や此の身と心との凡べてを献げて眞人の生活に立つことは之こそ私共の本望ではないか。されば友よ、眞に眞實に生くるにはどうしても是の道に融合して其の中から眞に動く自己の本心の活動を計るべきではないか。それが即ち念佛である。

—(二二五)—

お念佛よ！

仁川山口常照

南無阿彌陀佛！

永い事お前は塵埃の中に埋れて來た
久しい間お前の輝く姿は隠されて來た
いろ／＼の着物を着せられて
雑多の色に色づけられて

永い事久しい間純眞の姿は見わなかつた

お——盲目的念佛よ！

何等の眞實の要求もなく
意識的にハッキリした気分もなく
雲をつかむ様にただぼんやりと
何等念佛の目標もなく
ただめぐら滅法に唱へられる念佛

お——雷同的念佛よ！

人が有難さうに唱へる
何か譯は解らんが附和雷同して唱へる
人が死ぬ、悔に行く、拜む道かも知らん

人が念佛唱へるから

譯もなく唱へる、きまり悪さうに
ただ雷同的に、はにかみながら、

お——蓄音機的念佛よ！

ただ往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して
一枚起請文を茲までしか讀まんぞ
自分勝手に解釋して、手前免許で
ただ申せば助かるときめこむ
そして矢鱈蓄音機的にギャー／＼申す

信がこもらぬ、魂の抜殻よ

法然は疑なく往生するぞと思ひとりて
申す外には別に仔細なしと

蓄音機的念佛者はこゝをぬきにしてゐる
ただ申しの念佛では往生しまひぞ

それにしても因襲久しく
申し傳へられし念佛よ！

お——傳統的念佛よ！

内は祖先傳來の念佛宗だからとて申す
そこにも魂のひらめきは見えぬ
傳家の寶刃いと大事に

意味もなく心もなく
先祖に對して申譯的に、因襲的に
ただ申す傳統的の念佛、

お——屈從的念佛よ！

和尚は火鉢にあたり乍ら寒いのに
こら小僧お念佛申さんかと
朝お佛壇にお拜して念佛申さんと
御飯は食べさせませんよと

當商店は店則として朝三十分念佛すべし
然らざれば店員に採用せずと

寺の小僧も、坊やも、嬢ちゃんも、店員も
飯が食へんから

いやだと思ひ乍ら反抗する勇氣もなく
屈從を知りながら、自己を欺いて念佛す

小僧や坊やのはまだ無邪氣
だが血氣盛りの店員が

自己を欺き妥協して
虚勢された馬の様發洩の氣も失せて

獨立進取の氣象もなし
見難いぞ見難いぞ

屈從的に申す念佛！

お——職業的念佛

念佛の切り賣りよ

往生極樂より先づ御布施が目當、
ポク／＼／＼／＼

はてさていくら包むんだらう？

労働者は汗膏で賃金を得る
坊さん口先念佛で賃金を得る

お——職業的賃金念佛よ
早くかゝる念佛から足を洗つて

應供の自覺に立たばや
恥ぢず供養を受くるに足る資格の人たため

お——神賴的念佛よ！
悲しい時の神賴み

景氣の時には神も佛もそつちのけ
おれの腕をみよがしに

一度失敗の風に吹きまくられては
一錢か二錢の賽錢投げて

南無阿彌陀佛／＼
商賣繁昌家内安全

南無阿彌陀佛

神や佛も舌出して

この貪慾の人間奴が

益損ささしてやらうぞよ

それ！も氣づかず儲けたさの一念に
南無阿彌陀佛／＼その底級さ加減が

お——悲觀的念佛よ！

かねては念佛は喉につかへるといふ

親が死んだ、子が死んだ

夫が死んだ、妻が死んだ

悲しさのやりばに窮して

涙ながらに南無阿彌陀佛／＼

何それも束の間

のごもど過ぐれば暑さを忘るゝ

よくいふて悪くいはるゝ後家の髪

念佛はごこへやらさんで行く

ただ一時の悲しさの

氣まぐれの悲觀念佛

お——享樂的念佛！

兎角念佛の功德でか

申して居ると知らぬ間に

氣がスーッととして

いゝ氣持になる

何もかも打ち忘れて

念佛は有難い

言外の味があり

享樂的に申す念佛、

お——責任忌避的念佛よ！

内にあつては孫の守

嫁とは兎角氣が合はず

息子からは小言だら／＼

まゝよお寺でも參つて

お念佛申さうか

お寺參つた時だけがほんに極樂

内の事も忘れて氣がせい／＼する

愚痴も存分こぼして貰つた

お念佛申すと氣が晴れて

お寺が安樂、お寺が極樂！

責任忌避の享樂念佛

道樂息子が親父の小言ばかり頂戴する

まゝよと廊にかけ込む
呑めや歌へとははぐ
女郎や藝者を相手に
責任忌避の念佛者よ
お寺を廊にしては困る
坊さんを女郎や藝者にしては困る。

今度の三昧會

中村 辨 康

例年行事ではあるものゝ今度の三昧會は何となく
好い結果がある様に豫感せられてならぬので忙が
しい中からも悦ばしい輝きの心を以て準備がいそ
しまれました。「眞生」へも一寸廣告するにはしま
したが出し様が遅かつたので年始状の片端に毛布
御持參の事を御願ひして御案内に換へました。土
地の案内は私の關係筋丈騰寫刷で三百五十程致し
ましたが更に久我尾様がはがきを數百枚とマキビ
ラを五千枚夫れから大小のポスター百枚斗りして
下さいました。松永様は松永様で十二月初旬から

引續いて殆ど毎日廻廊の建設を御別時に間に合ふ
様にと世話を焼いて下さいました。かうした外護
の力に依つて三昧會が營まれたのは本年が始めて
であると共に私自身の上にも本年は社會的にも宗
門の上にも大に活躍すべく色々目に見えてゐる事
があるのので我が弱少なる力の充實が祈られて本當
に望みに充ち満ちた三昧會であつたのです。いよ
／＼七日となりました。準備未だ完からざる内に
開かる可き日が来て仕舞つたのであります。此時
私はツクツク思ひました。私達の一生もこうした
状態で、イサイナラをするのではなからふかと。
本當にぐづ／＼しては居られない。私達は眞劍に
百年の將來に於ける準備を完成して置かねばなら
ぬのであります。借て愈々三昧會が始まりまし
た。道場の作り方が不完全であつた爲めにかなり
寒くて本當に申譯もありませんでした。其れで
も總勢五十八人で本堂の一角に設けられた三昧道
場丈では狭まい位でした。宿六たる私は前述の如
き望みに充されて居り責任の上からも念佛に入り
浸らねばならなかつたのに拘らずいろ／＼の事に

引かされて二日目は始んど欠席の状態であり全く
念佛に没頭して仕舞ふことの出来なかつたは残念
でしたが申す念佛の一つ一つにかなりの充實さが
自覺されて矢でも鐵砲でも持つて来いと云ふ剛豪
な心の養はれた事を嬉しく思つて居ります。然し
自分の事よりも參加して下さつた眞摯な皆様の法
悦に充たされた御姿を拜するのが層一層の喜びで
ありました。わけても大きな喜びに止めどもなく
涙のあふれて御居でになつた方々を見る時私は思
はず涙が誘はれてなりません。熊澤國式様
鈴木まさ子様佐々木清吉様田中穂輔様其他の方
々の眞劍な求道姿には絶大なる共鳴と同情とを感
せざるを得ませんでした。今一々其感想を申述べ
る事は御遠慮いたしますが本當に大なる收獲とし
てどの位嬉しかつたか判らないのであります。
今ま永遠の記念として皆様の御名前を左に録させ
て頂きたいと存じます。(記帳順を御許し下さい)
愛知縣海部郡佐屋村佐屋 黒宮 平八
同 愛知郡日進村阿彌陀堂 淺井 順應
同 同 福安 稱順

- | | |
|---------------|--------|
| 同 海部郡佐屋村稻葉安清院 | 松岡 智禪 |
| 名古屋市西區新道町四丁目 | 畑田 はつ |
| 同 西區千歳町崇徳寺内 | 眞下 孝照 |
| 神戸市葺合町一、二、三、九 | 西藤 かね |
| 同 北長狹通二丁目一、二 | 鶴田 たき |
| 同 山本通四丁目八ノ四 | 藤村 よね |
| 愛知縣知多郡成岩町應稱院 | 青柳 智月 |
| 岐阜市高野町五丁目 | 伏見 儀七 |
| 静岡縣駿東郡原町桃里 | 鈴木 紋作 |
| 沼津市淺間町二三五 | 辻 義 |
| 愛知縣海部郡南陽村茶屋新田 | 熊澤 國式 |
| 静岡市住吉町 | 藤井 貞邦 |
| 同 | 藤井 さち子 |
| 同 | 藤井 とし子 |
| 同 清水市入江受新田 | 佐々木 清志 |
| 同 清水受新田 | 松永 兼吉 |
| 同 | 松永 光子 |
| 同 入江受新田 | 小川 なみ |
| 同 | 久我尾 正治 |
| 同 四日市市北川原町 | 中野 りう |

- 名古屋市中區御器所町布池 尾上 銀子 同 同 本町 天野 いく
- 同 東區宮町 山田 とも 同 同 中町 櫻田 らい
- 同 西區江川横町五 渡邊 初枝 同 清水受新田 窪澤 いね
- 愛知縣海部郡津島町西光寺 中野 善英 同 同 遠藤 やす
- 東京市深川區黒江町四二 都築 七太郎 同 清水二丁目 中田 清齋
- 横濱市神奈川青木町 内海 健郎 同 同 中町 齊藤 はつ
- 同 海岸通五ノ二〇 山崎 作藏 同 同 下清水福巖寺 友松 覺眞
- 愛知縣海部郡津島町眞壽寺 成田 心月 同 入受新田 長谷川 いね
- 大阪市東區東平野町五貞松院 杉本 壽博 同 同 久我尾 春子
- 沼津市淺間町二三五 辻 つや子 同 同 中村 康隆
- 東京市下谷區仲御徒町一ノ四七 小島 しも子 清水市入江町法岸寺 中村 康隆
- 靜岡市下魚町二九 田中 穂輔 清水市清水本魚町 中村 くら
- 兵庫縣尼崎市大物町圓平寺 松井 戒順 同 江尻町江淨寺 鶴谷 誠隆
- 堺市寺地町東三丁十五 松浦 卯之助 靜岡市 近藤 榮三
- 清水市入江受新田 鈴木 まさ子 清水市清水本魚町 中村 和子
- 靜岡市兩替町三丁目 栗生 來治 尚此外に御出になられる筈でありましたが御差
- 清水清水新道 松永 龜治 支へが出来て見なかつた方々が東京の小倉様神
- 同 清水本魚町 松永 かね 谷様浦賀黒岡様御殿場の神谷様靜岡の法月様關様
- 同 沼田 いち 藤枝の櫻井様名古屋の淺野様四日市の中野様岐阜
- 同 山本 てる の松浦様神戸の關浦様唐澤の宮澤上人等で御氣分

丈であつた方には和歌山の中井先生大垣の桑原様
松本の長澤様などでありませす。せめて此方々の半
分丈でも御出で下さいましたらどの位錦上更に花
を添ゆるの感が厚かつたでせうと殘惜しう御座い
ました。尚皆様御滞在中準備の不完全であつた点
水の悪かつた点(其後スツカリ井戸をやりがへま
したから今度は氣持よくなりました)防寒の設備

をしなかつた点、食物の味の悪かつた点などいろ
／＼御詫を致さねばなりません。どうぞこれに御
懲りなく此次の時も御出下さいませ様幾重にも御
願ひいたします。一々御禮状上げます筈であり
ますが紙上を借りて御挨拶に換へます事を御許し
下さいませ (完)

● 清水三昧會便り

鈴木まさ子様より

たのだらうと惜まれます。また皆ともあまり語らず無言でまゐりま
様でこんなによくして下さいませ。した此の折の心を口に出してしま
今回は御恩寵の下に御導きいただいたのになせもつと眞剣になれないの ひましたのであまり惜しいやうに
きまして此の上もなき喜びでござだらうとそれも悲しかつたり致し 思はれましたので過日もお話のあ
いました殊に浦賀迄も御供させてます。また御上人の尊い時間も此 つたやうに山の全體を見やうとす
いて下さいつまでも尊い思出としの小さき私の魂のために幾日か費 るならば一木一草に心を奪はれて
て喜んで居ります。ほんとに意味させ致しましたのも誠にすまない はいけないと今度御別れして始め
深い旅だつたとつく／＼感謝致し 事だと思ひます。私は喜びの限り て今御人格がはつきりと見えるや
て居ります此度の御別時も浦賀へ を以て感謝を捧げて居ります。 うに思はれました。私は家に歸り
の旅も皆私一人のためになされた 大船で下り列車を待つて居ります まして始めて自分の變つた事に心
やうに思はれごうしてこんな喜び 頃からだん／＼と寂しい心地にな づきました。見るもの聞くもの凡
の世界のある事を今迄しらなかつ つてまゐりました。汽車中は二人 て今迄とはちがつた心持で對せら

れるのでありました此の數日間大

□吾朋便り

寄贈並誌代拂込芳名

きい御恵みの下にあつた事を深く感謝致して居ります歌など申す可きものではありませんしまたあまり淺薄で自分でも感心しませんでしたせんが只感想を一つ御目にかけた御笑ひ下さいませ。

□道友の方々に 觀道より。來る歳も來る歳も新生の心に充ちて新年を迎へるのが私共の願いであり、又私共の喜びであります。乍然今歳ほど永生の希望に充ちて

寄贈の部 ○金貳拾圓清水實相寺様 ○金五圓富田トシ子様同山崎静子様同百々治之助様同久我尾正治様同都築七太郎様同藤村よね様 ○金貳圓澤本喜平藏様

法の道たづねて浦賀路や

新正を迎へた年とてはありません

誌代の部 ○金四圓五拾錢神奈川久里濱長安寺様 ○金四圓佐原眞様 ○金參圓實道様同桑名光徳寺様 ○金貳圓澤庄平様同青島辰次郎様同岡村常一様同野々山專成様同山田たけ様

會ひがたき人のめぐみに入ら

。妻は心より私の生道を援け子は

同五圓隆様同青柳智月様同久保領太郎様同山下清太郎様 ○金壹圓林信太郎様同石川良丹様同渡邊初枝様同藤井貞邦様同中村なか様同松田義様大平忠成様

わが心糸の如くに亂れしは

勿體ない限りであります。而も清水の三昧會はこれ又近年にない無限大悲の收獲でありました。新に

道に入る人も中々に多くお互に教

御佛の救ひの御手と知らずして

へられることの大なるに一同無限

ただたのめすがれと御慈悲に

たただのめすがれと御慈悲に

の感激でありましたオウ我が法の

友人よかうして心から共々に如來

あまり愚痴ばかりになりますから

の慈光を喜ぶことは私共にとつて

天を仰ぎ地にひれ伏して叩かんか

わが新生のよろこびの朝

又なき人生の喜びではありますま

いか。

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 眞 生 觀 道
編輯兼 土 屋
印刷人 三 井 清
東京市芝區三 田四國町二番三號